

巻頭言

若者たちと写真をたどる 震災 [調べ学習] プロジェクト

NHK 大阪放送局 アナウンサー

住 田 功 一

◆昭和50年の“警告”

「そういえば地学の授業で言うとしたなあ」。

阪神・淡路大震災から10年以上たって、高校の同窓会で何人もの同級生がそう口をそろえました。

昭和50年(1975年)、神戸市東部のある高校の1年生だった私は、地学教室でH先生の大切な一言を聞き逃していたのです。

それは、六甲山は土地が隆起してできたこと、それにもなって断層がいくつか走っていること、そして、神戸にも地震の心配があること。

私は、授業中に何をしていたのか、その前後の話も含めてまったく記憶にないのです。

実はその前年、神戸市の依頼を受けた京大と大阪市大の調査で、市街地の下に多くの活断層が走っていることが判明し、直下型地震の危険性を指摘しています(1974年11月『神戸と地震』神戸市)。地元の神戸新聞も、それを大きく報じていました。

いまから思えば、H先生はそうした調査報告を受けて、授業の合間のトピックスとして伝えたのかもしれませんが。

しかし、私を含む多くの人には「関西に地震はない」と信じていました。そんななかで、その警告は広がることなく、20年が過ぎました。

◆「なんで神戸がこんな目にあうんや」

あの朝、たまたま神戸の実家に帰っていた私は、ベッドの上で、激しい揺れにただ身をまかせていました。

第一報を入れた後、外に出て、高台から見た神戸の街には、見える範囲だけでも6か所から煙が上がっていました。電話に走り、再び東京のニュースセンターに報告しました。

「そのうち、3か所。これはおよそ3キロ以上離れている距離で、はっきりと炎が見えるぐ

らい火の手が上がっています」(1995年1月17日午前7時18分 NHK 総合テレビ同録から)
「なんで神戸がこんな目にあうんや」。私はしばし呆然としていました。

◆震災写真 [調べ学習] プロジェクト

阪神淡路大震災から15年を迎えた昨年、私は、中高生や大学生50人余で結成した防災学習企画のサポーターになりました。その名も、『震災写真 [調べ学習] プロジェクト』。

教科書の後ろのほうに載っている「阪神淡路大震災」。当時、幼かった若者たちにとって、震災は歴史の1ページ(場合によっては年表の1行)でしかありません。そんな彼らに、なんとか、災害の実相の一部でも知ってもらいたい、というプロジェクトです。

「火が迫っているのにどうして逃げないの?」、「なぜ鉄道の線路は歪んだまま放置されているの?」など、当時の報道写真には知りたいことがいっぱいありました。

撮影した新聞社のカメラマンに聞いてまず現場を探し出し、現地を訪ねて、周辺の市民にインタビューする。カメラとノートを手を、人から人へたどっていく…。

すっかり変わった町並に立ち尽くしたり、関係者の離別を知らされたりするうちに、15年の月日を思い知らされ、若い人にならと心を開いてくれたご遺族に巡り会い、そして、震災の日の朝の厳然たる事実を知らされることになります。

撮影者も知らない、写り込んだ人たちのその後が判明した例もありました。鉄道マン達の懸命な復旧作戦を聞き出すこともできました。(詳細は『僕たちの阪神大震災ノート』ウェブサイト <http://home.kobe-u.com/sinsai/> をご覧ください)

取材拒否にあってどうしたらよいか、転居先不明の人をどうたどればいいのか…。ミーティングでは引っ込み思案な彼ら。しかし、「手紙で誠意を伝えよう」「住宅地図を探してみよう」「電話帳にヒントはないか」という私のアドバイスを聞き逃すまいと、メモをとる姿は真剣です。

35年前、H先生の話をはんやり聞き逃していた私とは、おそらく目の色が違う。

彼らの中には、これからの人生で大きな災害に遭う人がいるはずです。

その時、呆然とたたずむのではなく、少しでも早く行動のスイッチを入れることができる。そんな人材になることを期待しています。

###

